技報第 21 号

巻頭言

『技術開発のマインド』

執行役員　技術本部長
大山　博明

ここ数年で，技術開発の目的や方向性，取り組み方が大きく変化した．当社の状況を振り返ってみても，5～6 年前までは，高強度材料，高耐久材料，橋梁とそれを構成する部材のより合理的な構造や施工方法，プレキャスト建築における新構法などを対象構造ごとの課題に応じて開発してきたように思う．現在は，環境負荷低減や生産性向上を大きなテーマとして，そのもとに主要な技術開発が行われている．

プレストレストコンクリート黎明期には，事業をすること自体が大きな課題，チャレンジであり，全てにおいて何らかの技術開発が必要であった．その後，橋梁の分野では，長支間化，多径間化，広幅員化などの規模の大型化，省力化や急速施工のためのプレキャストセグメントの採用，軽量化のための複合構造の採用，老朽化した橋梁の増加による修繕や更新ニーズの高まりなど，課題の変化に応じて技術開発が行われてきた．技術開発の必要性や課題の変化自体は，これまでも繰り返されてきたが，これまでとの大きな違いは，地球規模の環境問題や日本における人口減少と高齢化という，より根本的な課題がその背景にあるということである．

一方で，技術開発においては，これまでも，そしてこれからも変わらないこと，必要なことがある．それは，開発者が熱意をもって意欲的に取り組むこと，そして組織としても熱意や意欲を失わないことである．開発者が熱意や意欲を持てなければ困難な課題は解決できないし，それをバックアップする組織が熱意や意欲を失えば，長期に及ぶ技術開発の継続や実用化への取組みも難しくなる．仕事の方法や進め方は様々なツールによりデジタル化されても，結局は人と組織のマインドが重要なピースとなる．これを無くしてはならないと思う．

開発した技術は，現場で実際に使用されて，そこで社内および客先からの評価を受け，必要な改善や工夫が加えられて成熟する．開発から実用化までの段階を繰り返すことで，会社としての技術力も成長するものと思う．

当社は，これからもプレストレストコンクリートやプレキャストに関する技術を強みとして，新たな課題に挑戦する会社でありたいと思う．そして，そのためには，新しい技術に熱意をもって取り組む人，組織でありたいと思う．

2023年8月